

# 飲水思源

町長 松岡市郎

## 共生と常識

映画「写真甲子園0・5秒の夏」を東京大学工学部の学生と教授に鑑賞してもらい、懇談での話である。

東京ではサイレント（静けさ）が求められているという。大勢の人がイヤホンをして体や手を一斉に動かしている。何をしているのか？と思ったら「イヤホン盆踊り」だと言う。太鼓の音は周辺住民への騒音になる、と町内会などに苦情が入る。過剰なほどとも思える対策として、苦渋の選択なのだ。私たち農村に暮らすものにはイメージすらできない。またある町内会では、ラジオ体操の音楽が近隣住民の早朝安眠を妨害する、として全員がイヤホンを付けて体操する。これを「サイレントラジオ体操」と言うのだそうである。なんと便利な(?)世の中であることか。

風情のようなものはみじんも感じない。特定の人々にとってマイナスと思えるものは、すべて排除するということが道理になっているようだ。特定の人に不必要なものの排除という過剰排除は、共生の思想からは遠ざかってしまう。人々には、お互

いに補完し合う常識、共生が宿っているはずである。

閑話休題。映画撮影での話。銀行強盗をして路上を車で逃走するシーン、道路上下での撮影となるため、道路管理者や警察に届け出し承諾を得る。警察での話では「車逃亡のシーンは、シートベルトを着用してからの逃走でないと許可できません」「現実的な話として、強盗という違法行為をし、瞬時に逃亡するのにはいちいちシートベルトはしないでしょう」「映画とは言え、決まりは決まりですから」…。映画の世界でフィクション（創作話）を描くことは何とも難しい時代になった、と監督は嘆く。

一方、政治の世界はノンフィクション（実話）ではなく、何ともフィクションが次から次へ…。一体誰が脚本を書き、監督とプロデューサーは誰なのだろうか？ 東京大学のある教授曰く、「文書の書き改め、事実と異なる数字とフィクションがまかり通っているのが霞が関である」と（一同爆笑）。このようなことが「行政の常識」とならないように取り組まなければならない。

## ルポ児童相談所(一般書)

大久保 真紀:著 朝日新聞出版:刊



児童虐待に対応する最前線・児童相談所。虐待死事件が発生すると、なぜ未然に防げなかったのか、と批判と非難の矢面に立たされてきた。朝日新聞取材班は、西日本のある児童相談所で活動する児童福祉司たちに1カ月間密着。実態を知られていない彼らの奮闘、親から赤ちゃんを一時保護する様子など、取材を通じて知った「虐待保護」の実際の現場を描く。

## 君の名は。(DVD)

東宝株式会社



千年ぶりの彗星来訪を控えた日本。田舎町に暮らす女子高生の三葉は、小さく狭い町の中で町長である父親の選挙運動や家系の神社の古き風習に辟易(へきえき)していた。ある日、彼女は都会に暮らしている少年になった自分の夢を見る。一方、東京で暮らす男子高校生、瀧は、行ったこともない町で異性として生活する奇妙な夢を見るようになり…。(107分)

## 貸し出し図書ビデオ紹介

### せんとぴゅあII ほんの森

7月、せんとぴゅあIIに新図書室「ほんの森」がオープンしました。新図書室では本の貸し出しも始まりました。

★本、DVDの蔵書リクエストをお受けしています  
図書、紙芝居、雑誌は一人合計10点まで15日間、DVDは一人2本まで8日間。

## せかいでさいしょのポテトチップス(絵本)

アン・ルノー文、フェリシタ・サラ絵 BL出版:刊



料理自慢のクラムさんのレストランは、いつもお客さんで大繁盛。そこへやってきた自称、「こだわりや」の紳士の注文は「ポテトだけ」でした。腕によりをかけて料理したホクホクのポテトを「分厚い」と言われて何度も突き返されたクラムさんは、いたずら気分がわき起ります。アメリカであった実話をもとにしたポテトチップス誕生の秘密にせま